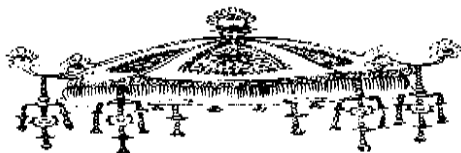


寶林精舎

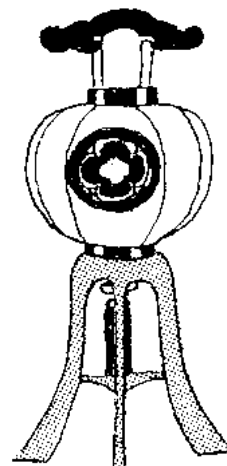
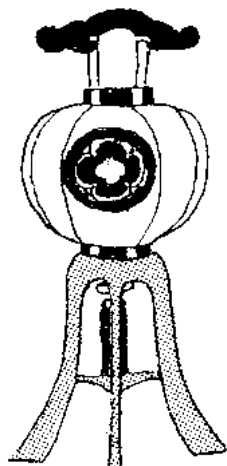
《題字・森神紫陽》



平成18年初盆のお家

喪主	続柄	故人名	命日	享年(数え年)	地区名
甲斐典昭	父	綱義	17年8月1日	87歳	下直見・江河内
田野沖義	妻	キミエ	8月1日	82歳	下直見・間庭
安藤泰生	母	シズエ	8月12日	92歳	岡山・倉敷
葛城幸一郎	父	亀鶴	11月11日	88歳	佐伯・鶴岡
鳴海トキ子	夫	植三郎	11月15日	75歳	蒲江・尾浦
竹元多加夫	養父	貞信	11月19日	87歳	上直見・竹の下
杉野良雄	父	正一	12月3日	83歳	上直見・新中
久保田和博	父	正徳	12月17日	91歳	仁田原・大鶴
大原節江	夫	昇	12月28日	64歳	横川・中組二
柳井清水	母	ナミ子	18年1月27日	96歳	赤木・市屋敷
小野今朝子	夫	忠	3月5日	90歳	仁田原・上の地
吉田努	父	憲司	3月19日	75歳	佐伯市・海崎
泥谷新一	妻	マスエ	3月25日	74歳	横川・蜷ノ崎
竇戸健	父	春生	4月16日	66歳	仁田原・岸の上
小原壽山	父	豊嶽	6月1日	81歳	仁田原・上の地
加藤隆美	養父	太郎	6月15日	87歳	仁田原・岸の上
大津健児	祖父	繁夫	7月3日	103歳	延岡市・富美山町

(平成18年7月25日現在)



第43号

正定寺花園会広報

平成18年夏発行 発行所 一部単価135円(非売品)

〒879-3104 大分県佐伯市直川大字仁田原 寶林山正定寺内

TEL 0972(58)2190 FAX 0972(58)2192・隠寮0972(58)2195

URL <http://www.saiki.tv/~shoji> e-mail shoji@saiki.tv

住職 寿山 士朗

〈家族みんなで読みましょう〉

本年のお盆参りについて

当山第二十一世千巖和尚の初盆以来三十六年間欠かさずに檀信徒孟蘭盆にはご供養を行って参りましたが、

今年はお盆第二十二世豊嶽義弘和尚の初盆になり、檀信徒各家へのお参りを今年に限ってご無礼させていただきますと思ひます。皆さまにはご迷惑をお掛けいたしますが、何とぞ意をお酌み取りの上ご理解を賜りたいと存じます。

尚、檀信徒のご先祖孟蘭盆供養を、右の時間に位牌堂でお勤めしています。

それぞれ都合の良い時間に合せてご家族でお参り下さい。
(位牌堂にはイスを準備しています)

八月十三日(日) 午前十時と午後三時 (二回の法要)
 十四日(月) 午前十時と午後三時 (二回の法要)
 十五日(火) 午前十時と午後三時 (二回の法要)

※位牌を持参する必要はありません。

※今年初盆を迎える檀信徒へはお参りを致します。

おつて各初盆家に日程をお知らせいたします。

《正定寺花園会役員名簿》

花園会会長(檀徒総代)	柳井道則
花園会役員(檀徒総代)	小野永生
花園会役員(檀徒総代)	柳井孝義
花園会会計・庶務	村西栄二
花園会女性部部長	矢野侃可
花園会女性部副部長	竹下好子
花園会女性部副部長	安藤リヨ子
花園会女性部副部長	川野久美子
花園会青壮年部長	小田木 聖孝

《正定寺花園会地区世話人名簿》

内水地区	戸高 浅生	椀杭地区	御手洗豊喜
岸の上地区	櫻井 米士	上の地区	小野美智治
細川内地区	長田小太郎	柚の原地区	岡田 喜敏
黒岩地区	川股 憲明	大鶴地区	久保田清江
羽木蜷地区	大竹 昭二	神の原地区	鴨尾 利夫
神栗地区	甲斐 一男	市屋敷地区	柳井 則幸
堂師地区	阿部 英治	野の内地区	後藤 保代
立長地区	安藤 美喜	中道地区	安藤 健辞
吹原地区	高橋 慶太	久留須地区	渡辺 淳一
竹園地区	吉田 禮子	閑庭・中津留地区	水久保光夫
江河内地区	吉田 勇	尾浦地区	富高 和夫
佐伯地区	仲宮 哲男		
花園会会計監査委員	御手洗 豊喜		
花園会会計監査委員	阿部 英治		
女性部会計監査委員	久保田 キヨ工		
女性部会計監査委員	小野 明美		



正定寺春彼岸 法要とお説教

本山春季定期巡教

去る平成18年3月19日(日曜日)に改修された位牌堂で
岩手県陸前高田市の慈恩寺住職である古山敬光和尚さまよりお説教を賜りました。
新しくなった位牌堂では初めての行事となりました。



前任妙心當山第二十二世豊嶽弘和尚大禪師

【豊嶽義弘和尚略歴】

道号 豊嶽（ほうがく）

諱 義弘（ぎこう）

出生 大正15年2月1日

得度 昭和19年4月8日

（千巖和尚により得度）

掛塔 昭和27年10月26日

住職 昭和29年4月15日

閑栖 平成元年7月1日

（任職歴35年）

法階 昭和57年10月20日

前任職

学歴 昭和19年・佐伯中学卒

昭和24年・臨濟宗専門

寺院 昭和27年・龍谷大学卒

昭和48年位牌堂建築

昭和57年別棟隱寮建築

平成4年本堂屋根修復

平成6年檀信徒墓地及

び駐車場を整備

平成10年山門修復

平成17年位牌堂修復

正定寺全ての建物・仏

像の修復や境内地の整

備を行う

社会 平成17年瑞寶双光章を

叙勲

兄弟弟子 森本眞道（佐伯・龍護寺

先住）

横山泰量（京都府・慈雲

平成十八年六月一日義弘和尚八十歳にて遷化致しました。六月三日の通夜・六月四日の密葬・六月七日の津送の際には御繁忙にも拘わらず遠路態々ご焼香下され且つ大勢の弔慰又真前には献華及びご香資を賜りご芳情の程誠に有り難く深謝申し上げます。津送では何かと不行届の段あつたかと存じますが何卒御寛容下さいませ様御願ひ申し上げます。七月二十二日無事に新忌齋の法要を終える事ができました。檀信徒には津送並びに新忌齋の厳修に際して過分な信援を賜りました事を重ねて御礼申し上げます。本来は新忌齋に皆さまのご焼香を賜るのが伝統慣例ですが津送に引き続きの法要と云うことで檀信徒を代表して総代の参拝をお願い致しました。

弔辞

第二十二世

本日當山 義弘和尚の津送を営まれるに当り謹んで弔意を表します

師は夙に令法久住の念篤く住山以来孜孜として寺門の護持と檀信徒の教化に盡瘁せられその功績著しく更に師に待つものが多大でありました。が溘寫として遷化せられましたことは、洵に痛惜の至りに堪えません。茲に恭しく弔儀を虔備し、もって哀悼の意を表します。

平成十八年六月七日

妙心寺派管長

東海大光

〈家族みんなで見ましょう〉

弔辞

和尚さん、とうとうお別れの言葉を述べる時が来ました。平成十八年六月一日午後二時四十五分、二階病棟詰所からの「お別れにおいでください」との電話で、君の末期を知りました。三時間前は、ねまき姿でしたが衣がえの日を待っていたかのように、君はきつちり白装束に身を固め、さすがと思うほどの見事な幕引き、穏かな顔つきの中に凛とした男ぶりを見せました。

ことの始めは昨年十月初旬のある日でした。

いつものように組織診断の仕事を進めるうち、肺の扁平上皮癌を見つけました。ふだん患者の氏名など確かめることもないのに、そのときばかりは何となく氏名欄に目を運び、そこに君の姓名を発見したのでした。衝撃が体を貫きました。径六センチという大きさが私を暗闇に突き落とししました。

二日後病院の廊下で、看護婦につきそわれる車椅子の君と出会いました。つとめて明るく「やあ」と声をかけ、ハイタッチを交わしたのでした。君も笑顔でした。その日以後、土日以外は毎日病室に通いました。当初は抗癌剤がよく効き、腫瘍マーカーの値は1/10にまで下がりがり、呼吸困難もかなり改善されました。三月中旬からステロイド剤の投与を受け、見る見る元気をとり戻し、食欲も増進しました。三度の病院食やデザートのほか、持ち込みの果物、魚、肉、菓子なんでもパクパク、話しぶりも昔に返り、口をさしはさむ暇を与えずこちららは相槌をうつのがやつとという日が続きました。三月下旬、桜が咲き始める頃からほゞ二カ月、正定寺の離れで、君も御家族も明るい幸せな日々を過ごすことができました。二週間ごとにお訪ねした私たちも、宝物のように尊い日時であったはずだと、君のために心の底から喜びました。五月中旬、再入院からの二週間、日ごとに衰えを見せましたが、痛みや苦しみを訴えることもなく、時折りの呼吸困難も痰の吸引ですぐに安らかになりました。奥様の願い通り、痛まず苦まず眠るように安らかに息を引きとったのでした。

療養中の八カ月、佐伯市にいる十人ほどの同級生が、病院に、または直川のご自宅に入れ替わり立ち代り君の顔を見に立ち寄ってくれました。過去六年間に関東と佐伯で十人の級友を失いましたが君ほどたくさん同級生から、しかも度々の見舞いを受けた人はいません。君がみんなから親しまれ、愛されていたからです。君の人柄の故です。ご家族の献身的な看護も浴びるほどに受け、一番幸せな病人でした。

君はまぶしいほどに光り輝くこともなく、あでやかな彩りに包まれるという派手な存在ではなかった。しかし目立たない君のそばには、じんわりと穏やかに伝わる暖か味がありました。長いつき合いの中で、君の怒りの言葉、荒げた声、罵り、ましてや叱咤、罵詈雑言、中傷、非謗の言葉を聞いたことがなかった。

温和、平穩、柔和、寛恕、寛大、穩便、穩当、ともかく穏やかで優しく暖かい人柄でした。おそろしくこのお人柄は生来のものでありましようが、もしかすると戦後の困難、混乱の時期に、仏教大学に学び、仏門にはいり、辛苦・艱難の修行の中でしつかりと身につけ、あるいは生来の美徳に磨きかけたのかも知れません。不治の病であることを知りながら、ふだん通りの談笑を交わす中で、恨み言、後悔、愚痴、不安、恐怖の言葉も口にしませんでした。そして親しまれる人柄に花を添えたのが飾らぬひょうきんさでした。軽妙洒脱な茶目っ気、これだけは光っていましたよ。子供の頃から、クラスの中で笑いの渦があると、その中心にはいつも君がいた。くしくも六月一日未明、君は少年時代の姿で私の夢に現れ、「別れに来たんよ。上んごと行くんか、下ん方か道がよう分らん。すまんが推薦状を二通書いちゃくれんかのー」とのたまった。

君が仏門、正定寺で果した功績の数々は私は知らない。しかし多くの檀家の方々、土地の人々から愛され、親しまれ、敬れたことは間違いない。和尚さん、それで十分ではないでしょうか。宗教家としてそれが一番大きな功績ではないでしょうか。カ一ぱいの拍手喝采を贈ります。

佐伯中学第三〇回生が織りなす星座の中で、大きく光り輝くことはないが、なくてはならぬ暖かい色の星が一つ消えてしまいました。八十年の長い生涯、ご苦労さんでした。

佐伯中学校第三〇回生 大塚 久

弔辞

謹んで今は亡き正定寺第二十二世豊嶽和尚様のご霊前に六十年にわたる数々の思い出を込めて最後の言葉を捧げなければならぬことを大変残念に思います。

あれは昨年宝林山を囲む山の緑が目にしみる五月も半ばでございました。

私はいつもと違って和尚様のお部屋にお邪魔して楽しく愉快な一時を過ぎて頂きました。

和尚様の純粋で無邪気だった子供の頃のお話し、昭和初めに生まれ戦前戦後の厳しい時代に青少年期を過ごしたお話し、任職在任中の悲喜こもごもの沢山のお話し等、話題豊富な和尚様のお話をじっくり聞かせて頂きました。

そして最後に御家庭のことにもふれられ、「一生健康に恵まれた方では無かったが、長い間、妻と支え合いながら楽しく過し、二人の子供、可愛い孫に囲まれて平和に暮らし、今年は傘寿を迎えることが出来た。これから先もお互い体に気をつけて、のどかに暮らしましょう」とおっしゃった和尚様の笑顔は一点の曇りも無く、まさにさわやかな五月の空の様でした。

外柔内剛、優しく穏やかな反面、任職の仕事に対しては強い情熱と正義感をもって終始されました。その和尚様が半年も経たないうちに突然身体の不調を訴えられ直ちに南海病院に御入院。奥様始め皆様の手厚い看護もむなしく、ついに六月一日八十歳を一期としてこの世を去られました。あまりに唐突なことに唯々、茫然自失の体でございます。誠に哀悼の情にたえませず痛恨またおくとおぼしめしません。

生ある者の宿命とはいえ、この様に早い御旅立を誰が予想したてでしょうか、どこで何が違ったのでしょうか。未だに信じられません。和尚様は大正十五年二月一日先代小原千蔵和尚の長男として生まれ、佐伯鶴城高校を経て、花園大学を御卒業、昭和二十九年任職に御就任、昭和六十四年迄の実に三十数年の長きに亘り偉大な業績を残されました。

特に百年目という本堂修復工事が行なわれ、緑の山を背に本村文化遺産としての面目を保ちました。又、三界万霊塔や多くの仏像を修復設置され理想の墓地を造成、寺院としての調和を整えられる等、美しい環境づくりに精進されました。更に長らく途絶えて居りました大般若会の復活、あらゆる行事の恒例化にも意を注がれる等々、その足跡は杖拳にいとまがありません。

慈愛に満ちた優しい和尚様。人の和を大切にして来られた、ほのぼのとし

た和尚様。そしてあなたの残された数々の偉大な功績はいつまでも私どもの胸の中に生き続けることでしょう。

今はただ心から御霊の冥福をお祈り申し上げ、御遺族の皆様の前途に限りない御加護を賜りますようお願い申し上げます。

和尚様長い間御苦勞様でございました。和尚様有難うございました。

安らかに眠りください。

本日はあなたの涙の葬儀に連なり感慨を禁ずることが出来ません。

友人の一人として謹んで弔辞を捧げます。

平成十八年六月七日

佐伯市直川大字下直見

前正定寺総代

甲斐 照光

閑栖和尚さまの津送にあたり、養賢寺老大師のご導師を賜り、又、親しくしていただいた四十名を越える和尚さま方のご焼香を頂き閑栖和尚さまのお見送りが出来たことを正定寺総代を代表して心より感謝申し上げます。

閑栖和尚さまの優しさに接していた檀信徒はもとより、六月一日の遷化は悲しみと共に我々若い総代にとっては戸惑いでありましたが、六月四日の密葬・七日の津送さらに七月二十二日の新忌齋と延べ百三十名の和尚さまを招いての法要を無事終えることが出来ました。

法類の和尚さまのお力添えや菩提寺に帰依する大勢の檀信徒のお陰で生前の和尚さまの導きに報いることが出来たと思っております。

檀信徒の皆さまには山門不幸の大事にご協力を賜り、特に「上の地区」の皆さんや世話人さま・女性部の方々には農繁期にも拘わらずご加勢を頂きました。

檀信徒のお陰で、やがて五百年を迎える古刹正定寺の面目を保つことが出来たと心から感謝申し上げます。

正定寺檀信徒総代長 柳井道則

新忌齋

7月22日午前11時より養賢寺・黄龍窟老大師のご導師のもと正定寺第22世豊嶽和尚の新忌齋が行われました。

一般の四十九日法要にあたる法要に大勢の和尚さまから諷経・焼香を賜り、遷化・通夜・密葬・津送・新忌齋と約二ヶ月間におよぶ一連の法会を無事に務め終える事が出来ました。

この間、檀信徒・地区世話人・総代役員・女性部の皆さんには連日ご加勢を賜り心から感謝申し上げます。

今後は豊嶽和尚の頂相・祖塔の準備にかかりますが法要の把住・放行は法類寺院・総代の点検を終えた後にご報告申し上げます。

又、すでに正定寺歴代和尚（祖師塔）の墓所整備は終わっています。



延べ130名・新忌齋には43名の和尚さまを招いて。導師は養賢寺黄龍窟老大師



通夜・密葬・津送・新忌齋と四度の法要に焼香を頂いた和尚さま方と故人との最後のお齋膳

〈家族みんなで読みましょう〉

平成18年度第3回花園会青壮年部研修会に参加して

正定寺花園会会計・事務局 村西栄二

去る平成18年6月24日（土）～25日（日）、京都の大本山 妙心寺・花園会館で開催された“平成18年度第3回花園会青壮年部研修会”に参加してきました。研修会は、第一日目（6月24日（土））花園会館にて12時 受付、午後1時に参加者全員で般若心経を挙げ、次に全国花園会青壮年部長の開会のことば、



妙心寺派管長（花園会総裁）のあいさつがあり、厳かな中、開会されました。続いて、特別講演「限りなき挑戦」と題して元広島東洋カープ 衣笠祥雄氏の講演が始まった。衣笠氏は、皆さんもご存知のとおり、プロ野球公式戦 最多出場記録等を持ち、「世界の鉄人」と呼ばれています。講演では、誰でもこれをやるんだという目標をもって人一倍真剣に取り組んでやれば、達成できるということを教えられました。次に「無相大師一代記」と題して、一龍齋貞花 師匠の講談がありました。講談では、平成21年に遠諱650年を迎える妙心寺のご開山さまである無相大師の教えである『請う其の本を務めよ』（喜びや悲しみの出どころはいったいどこ？）のメッセージを、650年後の今日、どう受け止め、どう日常生活の中で活かすことができるのか、この混迷の時代だからこそ、改めて問い直してみようということで、師匠よりお話がありました。最後に、妙心寺の「法堂」で30分間の坐禅を無心で行い、第一日目の研修会が終了しました。第二日目の研修会は、午前6時起床、午前6時30分から、朝のお勤めを「法堂」で行いました。30分間の坐禅に始まり、7時30



分から粥座（朝食）を、「微妙殿」で頂きました。ご馳走があるのかと思いましたが、本当のお粥に漬物少々のお食事で、さすがにすぐに腹が、減りました。次に「無相大師と妙心寺」のビデオを鑑賞し、引き続き、「無相大師とボランティア活動」と題して、花園会本部長の一色宏襄氏の講演があり、私共は、「おかげさまのころ」を率先して実践し、「よく教うればこれに従う」と言われる如く、子供たちの範となる様に精進しよう ということで、お話

がありました。最後にボランティア活動として托鉢と清掃奉仕があり、私は、清掃奉仕を選択し、小雨の降る中、街頭に出て、京都太秦映画村までの往復2 km程の清掃を行い、昼食をし、研修会のすべての日程を終了しました。このようにして、私は、今回の研修会で、さらに先祖を大事にし、これから、自らが生きていく上での一つの糧を学び、帰路につきました。檀家の皆さん方も一度は、本山にお参りしてみても、如何でしょうか。

〈家族みんなで読みましょう〉